

續せられ度し

前記期間經過後は理由の如何を問はず絶対に願書を受理せず

「バラグアイ」國及「ウルグアイ」國在留者は在「アスンシオン」及在「モンテビデオ」各帝國公使館出張所宛夫々手

續せられ度し出張所宛名は本告示末尾の通り

昭和十四年十一月十四日

在「ブエノス、アイレス」

帝國領事館

記

一、在帝國外徵集延期願

昭和十五年十二月二十日迄當館に於て昭和十五

年度徵集延期事務を取扱ふべきに付關係者は左記に依り速に手

續せられ度し

前記期間經過後は理由の如何を問はず絶対に願書を受理せず

「バラグアイ」國及「ウルグアイ」國在留者は在「アスンシオン」及在「モンテビデオ」各帝國公使館出張所宛夫々手

續せられ度し出張所宛名は本告示末尾の通り

昭和十四年十一月十四日

在「ブエノス、アイレス」

書式乙號

一、在留申告書

何年何月何日生

何府何市何區何町村字何番地

本人氏名

名画

二、本籍地

何府何市何區何町村字何番地

三、現在留地

アルゼン國何州何市何街何鐵道線何村

四、初メテ徵集ヲ延期

何年何月何日

五、七

六、

七、

八、

九、

十、

十一、

十二、

十三、

十四、

十五、

十六、

十七、

十八、

十九、

二十、

二十一、

二十二、

二十三、

二十四、

二十五、

二十六、

二十七、

二十八、

二十九、

三十、

三十一、

三十二、

三十三、

三十四、

三十五、

三十六、

三十七、

三十八、

三十九、

四十、

四十一、

四十二、

四十三、

四十四、

四十五、

四十六、

四十七、

四十八、

四十九、

五十、

五十一、

五十二、

五十三、

五十四、

五十五、

五十六、

五十七、

五十八、

五十九、

六十、

皇紀二千六百年に國祖へ迎を要す

一、皇道を世界に宣揚すること
私海外に在るもの等しく痛感することは、海外各國の政體の實相を見て祖國日本の國體が世界無比完璧であると云ふことである。外國に永くゐてその程祖國の國體が比類なき完全なことはつきり見えるのは、不思議な程である。

支那事變は實に祖國曠古の一の大事變である。當時では三韓征伐と朝鮮征伐の兩役あり近代では日清日露の兩役があつたが此度の支那事變程大仕掛けなものではないばかりでなく東洋永遠の攻略の軍を進めてゐる計りで、支那四百餘州を渡つて攻略を支援する英佛蘇米を相手に戦つてゐる觀がある。

蔣介石や第三國の軍事評論家は物資の乏しき日本は速決速戦には勝てるが愈々長期戦になる岳の靈峰を競うと最後の勝利は支那にあると云つてゐたが、それは尙日本をより望んだ方知らない甚しき誤算である。應仁の亂後群雄割据の亂麻の日本を統一した、豊太閤はその餘勢以来否神代の昔を推崇したが、惜しくも豈公の心として大家族を構成して來た、即ち皇室が英雄一度起つて應仁以来百年も家長であつて國戰つて國土は極度に疲弊困憊し皇室を中心病没するに及んで外征軍を納めたので有名な朝鮮征伐も結果は心より皇室が英雄一度起つてば應仁以来百年も心として大家族を構成して來たが、惜しくも豈公の心として大家族を構成して來た、即ち皇室が英雄一度起つてば應仁以来百年も家長であつて國戰つて國土は極度に疲弊困憊し皇室を中心病没するに及んで外征軍を納めたので有名な朝鮮征伐も結果は心より皇室が英雄一度起つてば應仁以来百年も心として大家族を構成して來たが、惜しくも豈公の心として大家族を構成して來た、即ち皇室が英雄一度起つてば應仁以来百年も

人活動地には金融機關の設置をして世界何れの國民ではないに留意し便宜と保護を計るが肝心である。移植民は行先地に骨を埋むる覺悟を以て奮闘努力して外に努力の結果世界に日の没する知らぬまでに發展した海外の支那事變發來物心兩方面に關して示した實行の現れや此度の支那事變は海外同胞に對し頗る知らぬまでに發展した海外の政策の宜しきを得たのは移植民が目的移住地に着くや先づ骨を埋むる墓地を選定して然る後鬱溝生活に入るを常とし世界各界の基礎を築いたからである。彼等の行為を丸呑みに學ぶ必要はないが英國の海外政策や英人の機関の設置、指導に盡力するこ

と又は大銀行支店設置に斡旋等が世界を股に掛けて活躍したそれは英國と在外同胞との間に益々恩愛の氣概は参考すべきである。英國は海外に擴張する外邦人の活動地に自らを守るために金融機関の設置、指導に盡力するこ

實力實行の人物要求

賀 集 九 平

關係は威力でなく飛躍的國力の發揚を見た當時思愛である、權い知ることが出来ると同時に我が國が皇得たことを歴史が教へてゐる。此度の支那事變は因て立つたものではなく實にその子が父母に服従することで皇室を中心とした日本民族の動亂は祖國こそ世界無二の完全無缺な國體でありある萬世一第三國も我が祖國の實力の前に立つたのであるから、此度から父兄が愛し給ふはそ聖戰の目的貫徹するまでは止むを得ずることで、即ち皇室が英雄一度起つてば應仁以来百年も其の勤労も、事毎に別離だてをする運氣に恵まれたのである。而し相手が粘が強い底である。而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。

現在は東亞新秩序建設が大體に於て歴史の眞に燐然たる光彩を添えて皇道を世界に宣揚することである。萬世一第三國も我が祖國の實力の前に立つて皇室を中心として皇室に宣揚することである。而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。

而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。萬世一第三國も我が祖國の實力の前に立つて皇室を中心として皇室に宣揚することである。而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。

而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。萬世一第三國も我が祖國の實力の前に立つて皇室を中心として皇室に宣揚することである。而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。

而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。萬世一第三國も我が祖國の實力の前に立つて皇室を中心として皇室に宣揚することである。而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。

而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。萬世一第三國も我が祖國の實力の前に立つて皇室を中心として皇室に宣揚することである。而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。

而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。萬世一第三國も我が祖國の實力の前に立つて皇室を中心として皇室に宣揚することである。而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。

而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。萬世一第三國も我が祖國の實力の前に立つて皇室を中心として皇室に宣揚することである。而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。

而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。萬世一第三國も我が祖國の實力の前に立つて皇室を中心として皇室に宣揚することである。而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。

而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。萬世一第三國も我が祖國の實力の前に立つて皇室を中心として皇室に宣揚することである。而して來る十一月十日舉行せられたる皇紀二千六百祭の大典に際して止まないものである。

驚く程低い對亞認識

小 林 磯 馬

外交官、使節

是大人物を

正金銀行駐在員

新井堯男

正

原

昇

恭賀新年

小林磯馬

謹賀新年

瀧波文夫

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

正

エル・ド・ラード異聞

インカ黄金境の神祕

探險者の文獻

即ちブリオン・ダンヴィュ氏、

ゴミリヤ教父

其他の歴史家は

キ

ト市

の住民はネグロ河を越へて

アマゾニア北方境界方面よりフ

ランコ河谷地帯に入り、地方

の土人が現在黄金湖と呼んでゐる。

トマス・ホーリー

云つてゐる。

トマス・ホーリー

アマゾン河を遡航し、この

伝説の湖を訪れたが自分の探險

統を他から推して、次のやうな

推測の一つが眞實ではあるまい

かとされてゐる。

トマス・ホーリー

アマゾニア

奥地

トマス・ホーリー

アマゾニア

マテ茶の傳説 『密林の妻』の復讐

振舞ひを亞羅國から受けて暖る時、知らぬ間に對する忠實を誓つて居るといふことを皆様は知らないこのマテ茶は永遠難いものとなるのです。茶の味は苦く甘く人生の好き嫌いなのですが、茶だけは離せないので、一度慣れてしまへばマテ茶の器に馴れて衣服、住居、職業になつてしまつます。それでせうか、終生仲間の夫婦となるのです。茶の味は苦く甘く人生の好き嫌いなのですが、茶だけは離せないので、一度慣れてしまへばマテ茶の器に馴れて衣服、住居、職業になつてしまつます。費用になつても同様、金を貰ふ金はなくつて、それよりも孤獨の時の少しだけは元のまゝで喫らなければなりません。貧乏になつても同様、金を貰ふ金はなくつて、それよりも孤獨の時の少しだけは元のまゝで喫らなければなりません。

「さ、復讐！」
林を見た者はそれ
で度潔で氣心の
難題をかけ、男
はその後にその男
を打撲するやうに
の男を許すといふ
絶対になく、その
まうといふのです。
パート一郎が忠實に
に嫁いだやうなも
うき、エルバ刈に
たり、エルバ刈に
合或ひは賣る場合
の上に腰を下し重
て澤山の報酬や代
やうにするといは
ス族のエルバテ
藪や森や草原
ひなどに發見され
にそのメンスが雇
を貰つて永年の貯
てゐた所が判然
は、その仲間が判
て叫ぶといひます
の復讐だと」

全全伏見 新年 JAPONES de 平井
正「東京」

ヨ
ル
ド
バ
市
義
八
秀
雄
郎
次
Luis S. Yamaguishi
RIVADAVIA 484
CORDOBA
ンタ・フエホ
兄弟

CORDOBA 市
正賀 正賀 正賀 正賀 正賀 正賀 謹
九

福水、大峯大伊洗色店「又エボリ」大阪『大比比賀新中山』カフエ『東京』カフエ『インペ

永流彌城守コルドミ
城吉秀松コルド
定城コルド
徳繁嘉コルド
波コルド
小ニツボン
リアル

市 吉 助	市 助 永	市 勝	市 龜	市 次 儀	市 一	市 吉 武
賀	サ ン	賀		賀		賀

正 前川雪江 正
正 青木小一郎 正
正 三島定吉 正
正 比嘉爲徳 正
正 テイアゴ
デル・エステロ市

中間市德志郎江直
賀全佐藤正賀石正賀玉城正賀中川正賀太田正賀國正賀桐正賀比正賀上正

原清次 嘉民秀 原茂 分鐵藏 村芳治 山三太郎 城喜慶 井兼利 旗嘉佐四郎治

謹賀新年

カフエ 東京

恭賀新年

カフエ一ハボネス

卷一百一十一

1

Feliz Año Nuevo
RESTAURANT
JAPONES
de
Luis S. Yamaguishi

サンタ・フエ市

賀新年

コルドバ市

賀新年
東京
山口未助吉

カブト 東京

賀 正
石 正

コルドバ

井兼利

100

第一二世と亞國の水產

賀 宮城良光		賀 菅原長吉		賀 竹原太郎		賀 橫尾一		賀 田川清		賀 守屋吉		賀 星吉		賀 中村陽三		賀 德永奇洋		賀 棚葉贊雄	
上	同	共	同	事	従	恩	共	業	事	従	支	當	取	り	國	す	がつ	恩	れ
共同	上	共同	同	事	従	恩	共	業	事	従	支	當	取	り	國	す	がつ	恩	れ

原儀七	藤水屋	電 話 一二三一二三四三
謹賀新	松武二吉	ウンベルトブリモ街二〇一三
鶴	内 純 雄	電 話 一二三一〇五二六
カフエ『ニッポン』	武 義 隆	ヘネラルオルノス街五五
謹賀新	土 土 井	染色店「マコソ」
恭賀新	水	染色店「サツマ」

清 英	豊	四 郎	惇	嗣 好	有 親	賀 正	新 垣 定 信	博 一 三 久 徳 之 助 義 郎
賀 川 村 一 郎	賀 富 田 源 吉	賀 舟 戸 繁 雄	賀 末 廣 館	比 嘉 松 永	忌中ニ付年賀ノ禮ヲ缺ク	サ ン フ エ ル ナ ン ド 町 コン ス テ イ ツ シ オ ン 街 一 四 八	バ ル ド ロ メ ・ミ ト レ 街 一 五 一 一 リ バ ダ ビ ア 街 五 二 二 〇 二 リ バ ダ ビ ア 街 五 一 九 九 サン フ エ ル ナ ン ド 町 コン ス テ イ ツ シ オ ン 街 一 四 八	チャ ヤ ル カ ス 街 一 八 七 三 一 リ バ ダ ビ ア 街 五 一 九 九 サン フ エ ル ナ ン ド 町 コン ス テ イ ツ シ オ ン 街 一 四 八

花卉共同出荷販賣組合

の目的と將來を憶ふ

池田喜城

(西)

昭和十五年一月一日

亞爾然丁時報

私は暫くの間、花のことと一緒に胸に満ちて来た。自分の乗つた船が南米の第一の港に着いた瞬間に、強く無爲にすごした私には、生活は一種の壓迫感で、胸に満ちて来た。これから激しく働かねばならないといふ悲壯な氣持にさへなつた。その氣持の中にある不安が群がつてくるのを、何うしても出来なかつた。私は深くその不安を追ひつめて考へつけた。不安は漠然とではあつたが、ある形の映像となつて、浮きあがつて來た。その映像を、擴んでなほ深く想ひ、そめて見ると、もつと現実的な問題となつて來た。

花卉栽培業界の進歩發達は、近年著しいものがあつた特に邦人の業者は、常に指導的尖端を歩いて來た。然しその道程は、決して樂なものでなかつた。栽培に經營に、販賣出荷に幾多の困難が、資本が必要とされた。その最も顯著なものは、從来共に出荷販賣組合の組織がある。ホセ・セ・バス共同出荷販賣組合がそれである。同組合は一九三六年三月に創立され、從来組合員の非常な熱意と努力によつて、今日の坦々たる花卉栽培業界の出荷販賣經營の諸問題を改革すべき開拓の道を、力強く歩み來つた。その業績は既に理論の時代を過ぎて、各地にこの組織の實行の時代が到來した。即ち昨年オエステ緑邦人業者による、サンミゲール在住邦人業者の組織する機運となつて、茲年中には専門会議の創設される、最早遅いやうだ。ことに、日本大栽培業者に、サントスの生産花園の危惧感が漂つて居つた。組織的構成度運営の切實な問題が毎月の例會で、激しく厳しく検討されられた。毎月の例會で、吾々が當初に参觀に來たものは、吾々の激

烈な論争に驚いたものであつた。自分の乗つた船が南米の第一の港に着いた瞬間に、強く無爲にすごした私には、生活は、凡ての點に急速に發展向來ある。これから激しく働くべき道はない、それは腰られたと、自分は信じられない。これは今日も變らないで受けた。自分の乗つた船が南米の第一の港に着いた瞬間に、強くばこそ、最も貧乏で新獨立者の多かつたホセ・セ・バスの組合員の道は、規律統一された販賣と

時期を遡らることは出來ると思

はれるが、共同出荷販賣組合の

統制より取るべき道はない、

それが、さてこれを

現在のやうな、餘りにはつきり

してゐる、個性的販賣と出荷方

法では、販賣統制を實行に移すことは全く至難なことである

明瞭であると思ふ。

結局は、販賣の合理化、即ち

私は信じてゐるが、さてこれを

現在のやうな、餘りにはつきり

してゐる、個性的販賣と出荷方

法では、販賣統制を實行に移すことは全く至難なことである

明瞭であると思ふ。

賀正

五十嵐俊二

有水藤太郎

賀正

西坂典藏

賀正

秋山幸光

賀正

米須清一

賀正

仲村梁恒郎

賀正

恩田經男兄弟

賀正

秋吉寅藏

賀正

善野貞雄

賀正

青木貞夫

賀正

上桶甚太郎

賀正

河西岩三

賀正

松廣忠次

賀正

山下汽船會社

下里己之助

謹賀新年

謹賀新年

銀河畔園藝業組合

有限責任

事務所 アベニーダ・ローケ・サエンス・ペニヤ六一六(二階)

電話(三三)一〇五一、一〇五二、一〇五三、一三六五

電話(コオペラティバ・セントラル)二〇四七

恭賀新年

西和文活版印刷

ニッポン堂北川稔

二五・デ・マリオ街五
電話 三一六〇六〇

サンディヤゴ・デル・エスティード・アベニーダ・カビルド街八番
電話 二三一七七八六四

號特年報

赤鷗の翅が葉鷄頭の上に弱い秋の陽をとどめてゐる

——生活原理は勤かない——

風があるのか
蜻蛉は、碧空の光りの中に流れ
——冒險と旅情が映つてゐる

先日ある會合の席上で、近頃は温つて壁紙が剥げ落ちたり、洋様のことを云ふ人があり、ブノス・アイレスと温氣の件についての記憶である。ボルテニヨ(B・A人の足)にまめの多いと言ふことは定評の半ばは空氣の乾燥した奥地のエスタンシアで暮す人が少なく、温氣の加減で足を傷めてゐる人は極めて多い、特に足にびらすある。この轉地保養を實行するには何も有産階級の人々に限られ、手足が大儀になるから、一年中半年は當市に在住し、後はお洒落と温氣が禱してしまつた譯でなく、當地人は一般的に體を温めることを好む。エスクバーラ(F、C、C、A)の休日を利用して、座としきのデイクロと稱す妙な職業の繁昌都會を逃れて、野外に靜養する事がある。毎年夏季には、海濱や山嶽地帶へ夥しい人が避暑をするが、夏マーチルブルタの海濱へ避暑した旅客の數は三十萬人と言はれる。

横濱建吉

記憶してゐる。ボルテニヨ(B・A人の足)にまめの多いと言ふことは定評の半ばは空氣の乾燥した奥地のエスタンシアで暮す人が少なく、温氣の加減で足を傷めてゐる人は極めて多い、特に足にびらすある。この轉地保養を實行するには何も有産階級の人々に限られ、手足が大儀になるから、一年中半年は當市に在住し、後はお洒落と温氣が禱してしまつた譯でなく、當地人は一般的に體を温めることを好む。エスクバーラ(F、C、C、A)の休日を利用して、座としきのデイクロと稱す妙な職業の繁昌都會を逃れて、野外に靜養する事がある。毎年夏季には、海濱や山嶽地帶へ夥しい人が避暑をするが、夏マーチルブルタの海濱へ避暑した旅客の數は三十萬人と言はれる。

記憶してゐる。ボルテニヨ(B・A人の足)にまめの多いと言ふことは定評の半ばは空氣の乾燥した奥地のエスタンシアで暮す人が少なく、温氣の加減で足を傷めてゐる人は極めて多い、特に足にびらすある。この轉地保養を實行するには何も有産階級の人々に限られ、手足が大儀になるから、一年中半年は當市に在住し、後はお洒落と温氣が禱してしまつた譯でなく、當地人は一般的に體を温めることを好む。エスクバーラ(F、C、C、A)の休日を利用して、座としきのデイクロと稱す妙な職業の繁昌都會を逃れて、野外に靜養する事がある。毎年夏季には、海濱や山嶽地帶へ夥しい人が避暑をするが、夏マーチルブルタの海濱へ避暑した旅客の數は三十萬人と言はれる。

記憶してゐる。ボルテニヨ(B・A人の足)にまめの多いと言ふことは定評の半ばは空氣の乾燥した奥地のエスタンシアで暮す人が少なく、温氣の加減で足を傷めてゐる人は極めて多い、特に足にびらすある。この轉地保養を實行するには何も有産階級の人々に限られ、手足が大儀になるから、一年中半年は當市に在住し、後はお洒落と温氣が禱してしまつた譯でなく、當地人は一般的に體を温めることを好む。エスクバーラ(F、C、C、A)の休日を利用して、座としきのデイクロと稱す妙な職業の繁昌都會を逃れて、野外に靜養する事がある。毎年夏季には、海濱や山嶽地帶へ夥しい人が避暑をするが、夏マーチルブルタの海濱へ避暑した旅客の數は三十萬人と言はれる。

記憶してゐる。ボルテニヨ(B・A人の足)にまめの多いと言ふことは定評の半ばは空氣の乾燥した奥地のエスタンシアで暮す人が少なく、温氣の加減で足を傷めてゐる人は極めて多い、特に足にびらすある。この轉地保養を實行するには何も有産階級の人々に限られ、手足が大儀になるから、一年中半年は當市に在住し、後はお洒落と温氣が禱してしまつた譯でなく、當地人は一般的に體を温めることを好む。エスクバーラ(F、C、C、A)の休日を利用して、座としきのデイクロと稱す妙な職業の繁昌都會を逃れて、野外に靜養する事がある。毎年夏季には、海濱や山嶽地帶へ夥しい人が避暑をするが、夏マーチルブルタの海濱へ避暑した旅客の數は三十萬人と言はれる。

記憶してゐる。ボルテニヨ(B・A人の足)にまめの多いと言ふことは定評の半ばは空氣の乾燥した奥地のエスタンシアで暮す人が少なく、温氣の加減で足を傷めてゐる人は極めて多い、特に足にびらすある。この轉地保養を實行するには何も有産階級の人々に限られ、手足が大儀になるから、一年中半年は當市に在住し、後はお洒落と温氣が禱してしまつた譯でなく、當地人は一般的に體を温めることを好む。エスクバーラ(F、C、C、A)の休日を利用して、座としきのデイクロと稱す妙な職業の繁昌都會を逃れて、野外に靜養する事がある。毎年夏季には、海濱や山嶽地帶へ夥しい人が避暑をするが、夏マーチルブルタの海濱へ避暑した旅客の數は三十萬人と言はれる。

恭賀新年

染色店『ハボネサ』
サンディアゴ・デル
エステロ街一四〇七

謹賀新年
玉城福棟兄弟
コルドバ市

謹賀新年
安里龜榮
本店 ピヤモンテ街三三〇
支店 マイブー街六八三
支店 フンカル街六二六

正賀新年
永田左近之丞
カフェ『日本』

正賀新年
谷本拓良
洗色店『東京』

正賀新年
平良精雄
アルマセン『ニシザカ』
アウェストラリア街一一〇一
電話二二一九一五

石川龜下

染色店『ペルグラー』
リバダビヤ街一一三六

謹賀新年
比嘉桐功
マル・デル・プラタ

正賀新年
正全仲間正
ラ・プラタ市四九街角八街

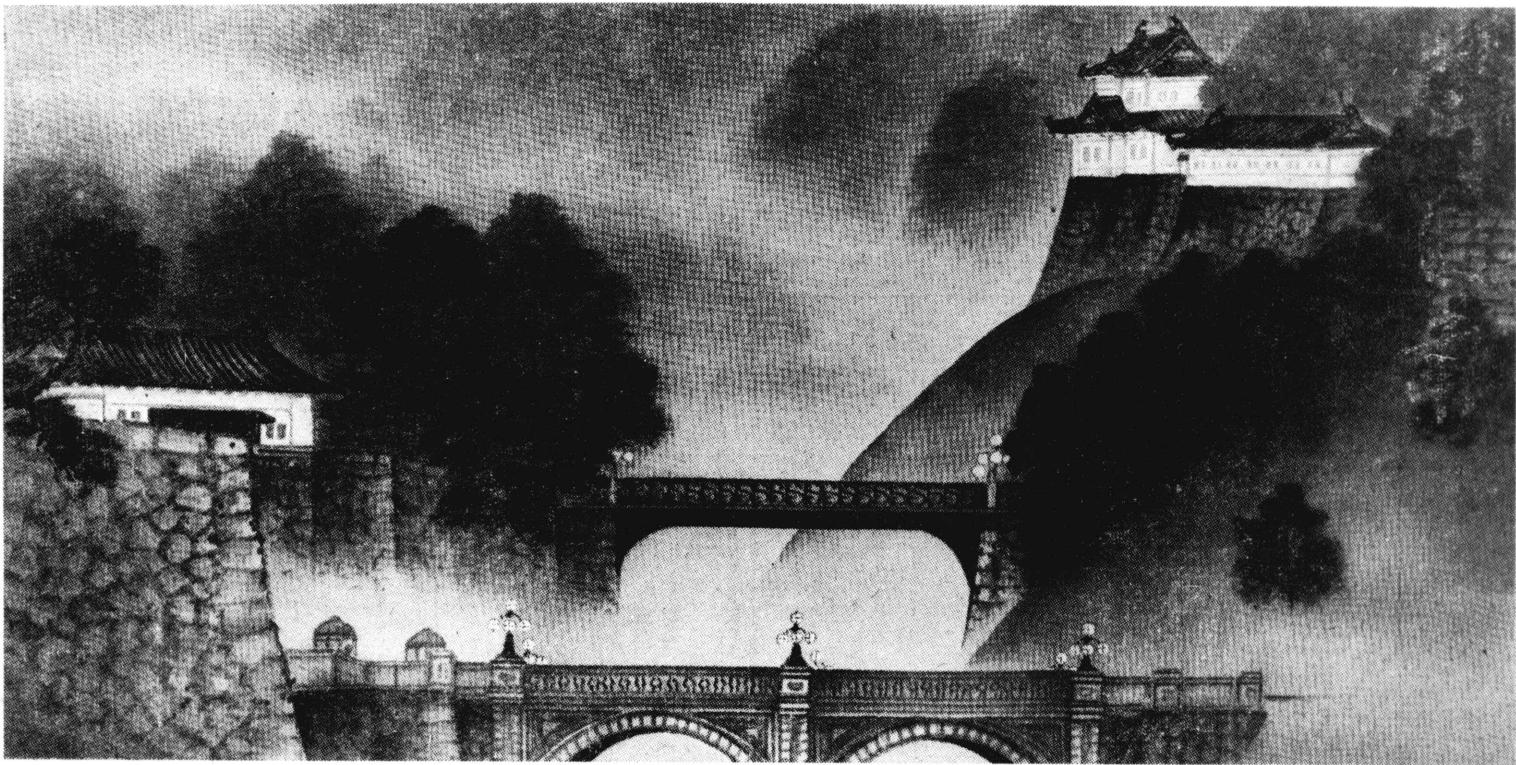
正賀新年
新屋數平吉
ドロレス市

正賀新年
志名共
洗色店『東京』

正賀新年
平良精雄
洗色店『ラ・ハボネサ』
本店 アベニーダ・アレン三六四
支店 マルティネス

記憶してゐる。ボルテニヨ(B・A人の足)にまめの多いと言ふことは定評の半ばは空氣の乾燥した奥地のエスタンシアで暮す人が少なく、温氣の加減で足を傷めてゐる人は極めて多い、特に足にびらすある。この轉地保養を實行するには何も有産階級の人々に限られ、手足が大儀になるから、一年中半年は當市に在住し、後はお洒落と温氣が禱してしまつた譯でなく、當地人は一般的に體を温めることを好む。エスクバーラ(F、C、C、A)の休日を利用して、座としきのデイクロと稱す妙な職業の繁昌都會を逃れて、野外に靜養する事がある。毎年夏季には、海濱や山嶽地帶へ夥しい人が避暑をするが、夏マーチルブルタの海濱へ避暑した旅客の數は三十萬人と言はれる。

奉祝紀二千六百年



地球は大きく其處に國を成すものは多い。而して其の一つの國民は自國の生命を永遠と信じ又斯く願つて居るのである。埃及、支那、印度、希臘、英國は歴史に名を馳せた等古代に於て世界に名を馳せた國は歎からず又其の山河は今も猶昔ながらの姿を維持するものと思はれるが、現代科學の進歩や交通機關の發達等に依つて起る激甚なる生存競争に堪へ難く、地球上から其の名を消滅されない様にと徒に喘を續けて居るかに見へる。最近世界の地圖から扶殺された奧太利、チエコ、波蘭等の國民の運命に就ては傍観者としても一掬の涙を落さ得るものである。

吾々は今日本帝國の建國三百年周年を迎へるのであつて其の光榮と喜びは日本國民のみ味ひ得るものである。

英、米、佛、獨を始めとして世界に國は多からんも二千數百年に亘り上萬一系の天子を戴き、下忠勇なる國民を擁し建國以來國土を外敵に委ねたることなしと云ふ國は絶対に外にない、想へば光輝ある日本帝國である。

大昔天照大神は皇孫に勅して

「葦原の千五百秋の瑞穂天神地より宜しく爾皇孫就いて治せ給天孫の隆えません」と當に天壤と窮無かるべしと

天變地異に依つて心身を鍛へられ忠孝一本の道徳で訓育された吾々日本國民こそ如何なる國難にも堪へる力が無くてはならぬ。

母國に於ては肇國の大理想を

敬虔の念を以て本日の元旦を賀

すのである。

元旦は、萬邦無比の我國體の精良令官支那派遣總司令官支那艦隊司令長官、朝鮮總督伊勢大神宮の國運隆昌、武運長壽を唱へなり。而して慶繁を以て、新御祭を之に申すのである。

大臣の年頭所感、次で關東軍司

連絡として皇紀既に二千六年

節を期して実施のことに決定し致し、新南洋の首府ウエーリントン

天皇の臣民を愛撫し給ふこと義は君臣にして情は父子、を成すの觀を呈するのであるが、必ず西國を去らねばならぬ。我が國の國體が紀元二千六年に於けるべきである。茲に我が國の國體を

際して帝國天賦の大使命達成の儀、烏國に在留せらるゝ我同訪問各方面的識者に日本の實情

決意を如何に堅めて居胞諸氏と御別れ致す事は甚だ名を紹介され特に丸山先生は

かは、新年以後順次に現はれ残が惜まるゝのである。私は常

「中南米の旅」を上梓、南米各地

の事情を廣く日本朝野へ紹介せらる事を祈つて年頭の辭とす。



年頭之辭

總領事 福間 豊吉

居るのであるが、今後世界の形勢

の變化如何に依り此の船の手は

更に擴かることとなるであらう

即ち船の對波蘭作戰の終了を機

年を迎へんとする日本國民は全

世界の驚異的である。

運命の神は今吾々日本人をし

て世界の檻舞台に登らしめて居

る。全智を絞り全能を擧げて此

期時代に於て建國二千六百周

年を迎へんとする日本國民は全

世界の底から湧出する自尊

心と責任觀を味ふべき秋であ

る。百萬言の所よりも現はす

ものには多く混沌として居る、歐洲

の動亂は何時世界の動亂と成す

る。やも測り知れぬ、此の歴史的

世界人類の平等愛等々吾々の理

想は燈台の如く前途に輝いて居

る。私は今皇紀二千六百年の元旦

を迎ふるに當り異郷の空天高く

日章旗を仰ぐ時唯目頭の熱くな

るを禁じ得ない、日章旗の有難

魂であり血であり日本精神であ

る。光榮ある歴史に御く吾々日

が海を渡して始めて知る實感

日本人は壯の底から湧出する自尊

心と責任觀を味ふべき秋であ

る。百萬言の所よりも現はす

ものには多く混沌として居る、歐洲

の動亂は何時世界の動亂と成す

る。やも測り知れぬ、此の歴史的

世界人類の平等愛等々吾々の理

想は燈台の如く前途に輝いて居

る。私は今皇紀二千六百年の元旦

を迎ふるに當り異郷の空天高く

日章旗を仰ぐ時唯目頭の熱くな

るを禁じ得ない、日章旗の有難

魂であり血であり日本精神であ

る。光榮ある歴史に御く吾々日

が海を渡して始めて知る實感

日本人は壯の底から湧出する自尊

心と責任觀を味ふべき秋であ

る。百萬言の所よりも現はす

ものには多く混混沌として居る、歐洲

の動亂は何時世界の動亂と成す

る。やも測り知れぬ、此の歴史的

世界人類の平等愛等々吾々の理

想は燈台の如く前途に輝いて居

る。私は今皇紀二千六百年の元旦

を迎ふるに當り異郷の空天高く

日章旗を仰ぐ時唯目頭の熱くな

るを禁じ得ない、日章旗の有難

魂であり血であり日本精神であ

る。光榮ある歴史に御く吾々日

が海を渡して始めて知る實感

日本人は壯の底から湧出する自尊

心と責任觀を味ふべき秋であ

る。百萬言の所よりも現はす

ものには多く混混沌として居る、歐洲

の動亂は何時世界の動亂と成す

る。やも測り知れぬ、此の歴史的

世界人類の平等愛等々吾々の理

想は燈台の如く前途に輝いて居

る。私は今皇紀二千六百年の元旦

を迎ふるに當り異郷の空天高く

日章旗を仰ぐ時唯目頭の熱くな

るを禁じ得ない、日章旗の有難

魂であり血であり日本精神であ

る。光榮ある歴史に御く吾々日

が海を渡して始めて知る實感

日本人は壯の底から湧出する自尊

心と責任觀を味ふべき秋であ

る。百萬言の所よりも現はす

ものには多く混混沌として居る、歐洲

の動亂は何時世界の動亂と成す

る。やも測り知れぬ、此の歴史的

世界人類の平等愛等々吾々の理

想は燈台の如く前途に輝いて居

る。私は今皇紀二千六百年の元旦

を迎ふるに當り異郷の空天高く

日章旗を仰ぐ時唯目頭の熱くな

るを禁じ得ない、日章旗の有難

魂であり血であり日本精神であ

る。光榮ある歴史に御く吾々日

が海を渡して始めて知る實感

日本人は壯の底から湧出する自尊

心と責任觀を味ふべき秋であ

る。百萬言の所よりも現はす

ものには多く混混沌として居る、歐洲

の動亂は何時世界の動亂と成す

る。やも測り知れぬ、此の歴史的

世界人類の平等愛等々吾々の理

想は燈台の如く前途に輝いて居

る。私は今皇紀二千六百年の元旦

を迎ふるに當り異郷の空天高く

日章旗を仰ぐ時唯目頭の熱くな

るを禁じ得ない、日章旗の有難

魂であり血であり日本精神であ

る。光榮ある歴史に御く吾々日

が海を渡して始めて知る實感

日本人は壯の底から湧出する自尊

心と責任觀を味ふべき秋であ

る。百萬言の所よりも現はす

ものには多く混混沌として居る、歐洲

の動亂は何時世界の動亂と成す

る。やも測り知れぬ、此の歴史的

世界人類の平等愛等々吾々の理

想は燈台の如く前途に輝いて居

る。私は今皇紀二千六百年の元旦

を迎ふるに當り異郷の空天高く

日章旗を仰ぐ時唯目頭の熱くな

るを禁じ得ない、日章旗の有難

魂であり血であり日本精神であ

る。光榮ある歴史に御く吾々日

が海を渡して始めて知る實感

日本人は壯の底から湧出する自尊

心と責任觀を味ふべき秋であ

る。百萬言の所よりも現はす

ものには多く混混沌として居る、歐洲

の動亂は何時世界の動亂と成す

る。やも測り知れぬ、此の歴史的

世界人類の平等愛等々吾々の理

想は燈台の如く前途に輝いて居

る。私は今皇紀二千六百年の元旦</p

東亞黎明の 新春を迎ふ

種賀新率

(一)

新陽煥然東方より世界を照らし、光茫茫き皇紀二千六百年の春は、國の内に在ると外に在ることを問はず、我等日本人を一様に訪れる。この光輝ある元旦を迎へて、建國悠遠の念に浸り、皇景仰の心を深くすると共に、今や事變第四年目に於ける東亞の情勢を大觀し、茲に民族伸展の意欲を昂揚する時、生を萬邦無比の國土に享けたる國民的欣幸と誇負との、愈々強く大なるを體認し、時代の益々重きを痛感するのである。洵に神武天皇日向の國より東征の途に上らせられ、刻苦堅忍草昧の國土を切り拓かせられて、大和の櫛原宮に即位し、初めて國璽を築き給ひしより正に二千六百年を経過したこの年は、その規模の廣大なること東洋に於て前古に類例を見ざる日支事變が、解決の曙光を浴び亞細亞大陸に黎明を齎し來らんとする秋である。

即ち興の大業に乗出しつゝある「日出る國」日本を繞り、その光茫を反映して東洋の諸國も亦西洋の擄取と脅威の影を追拂ひ、その本來の光輝を發揚せんとするの相貌を露呈し來り、白人萬能の世界歴史はこの萬紀二千六百年を轉換の起點として民族自主の方向へ大きな旋回を描かんとしてゐるのである。

而も斯くて東亞が新秩序の建設に邁進する時、歐洲の戰雲は愈々暗黒、彈雨は益々緊密、交戦國は専ら破壊を事とし、極東干渉の手を緩めんとして、あるを以て、この事態を自し、亞細亞に外敵一蹴の「神風」が吹くと唱へられるに到つて居る。

乍然事態は樂觀を以て終始し得ないのであるが、事變は解決の曙光を認知し得るの程度であり前途暗淡、而かも目を兩隣に轉ずれば、歐洲交戰國の勢力消耗に乗じて、擡頭せんとするソ聯陸の彼方より魔手を伸ばさんとし、強化されたる米國の彼方より巨砲を我が擬してゐるのである。

斯る事局に對處せんが爲には世界史に於て持たんとするところの意義を一言闡明し、國運の大躍進を祈念し、恭しく聖壽年頭に際し皇紀二千六百年が一大躍進を祈念し、恭しく聖壽の萬歳を唱和奉る。

東亞黎明の新春を迎ふ

謹賀新年

飯野榮作

宮崎五郎

甘利伊太郎

小椋專一

山本喜平

庄司善七

特命全權公使

公使館一等書記官

兼領事

海軍中佐

公使館附海軍武官

福間豊吉

伊藤清藏

高桑讓

大森貞夫

加藤克一

稻尾孝樹

橋岡實

宗像國三郎

金井宇吉

在大阪

在京都

安田敏藏

在大阪

千原庄五郎

在大阪

山下八郎

在大阪

村山豊

在大阪

高橋盛二

在大阪

浅野政吉

在大阪

大橋久一

在大阪

沖田芳雄

在大阪

全定一

在大阪

佐伯亥九二

在大阪

栗谷信

在大阪

渡邊又喜

在大阪

喜田正雄

在大阪

竹内重吉

在大阪

原喜三郎

在大阪

石井清造

在大阪

増田重造

在大阪

前川留次郎

在大阪

羽柴哲

在大阪

池田喜城

在大阪

竹谷啓二

在大阪

濱谷源輔

在大阪

品田重忠

在大阪

鴨秀雄

在大阪

尾崎明

在大阪

安東定夫

在大阪

本間鉄雄

在大阪

甘利造次

在東京

近藤知次

在東京

廣瀬寛治

在東京

大森貞夫

在東京

飯野榮作

在東京

宮崎五郎

在東京

甘利伊太郎

在東京

佐伯亥九二

在東京

栗谷信

在東京

渡邊又喜

在東京

稻尾孝樹

在東京

大森貞夫

在東京

飯野榮作

在東京

宮崎五郎

在東京

佐伯亥九二

在東京

栗谷信

在東京

渡邊又喜

在東京

稻尾孝樹

在東京

大森貞夫

在東京

飯野榮作

在東京

宮崎五郎

在東京

佐伯亥九二

在東京

栗谷信

在東京

渡邊又喜

在東京

稻尾孝樹

在東京

大森貞夫

在東京

飯野榮作

在東京

宮崎五郎

在東京

佐伯亥九二

在東京

栗谷信

在東京

渡邊又喜

在東京

稻尾孝樹

在東京

大森貞夫

在東京

飯野榮作

在東京

宮崎五郎

在東京

佐伯亥九二

在東京

栗谷信

在東京

渡邊又喜

在東京

稻尾孝樹

在東京

大森貞夫

在東京

飯野榮作

在東京

宮崎五郎

在東京

佐伯亥九二

在東京

栗谷信

在東京

渡邊又喜

在東京

稻尾孝樹

在東京

大森貞夫

在東京

飯野榮作

在東京

宮崎五郎

在東京

佐伯亥九二

在東京

栗谷信

在東京

渡邊又喜

在東京

稻尾孝樹

在東京

大森貞夫

在東京

飯野榮作

在東京

宮崎五郎

在東京

佐伯亥九二

在東京

栗谷信

在東京

渡邊又喜

在東京

稻尾孝樹

在東京

大森貞夫

在東京

飯野榮作

在東京

宮崎五郎

在東京

佐伯亥九二

在東京

栗谷信

在東京

渡邊又喜

在東京

稻尾孝樹

在東京

大森貞夫

在東京

飯野榮作

在東京

宮崎五郎

在東京

佐伯亥九二

在東京

栗谷信

在東京

渡邊又喜

在東京

稻尾孝樹

在東京

大森貞夫

在東京

飯野榮作

在東京

宮崎五郎

在東京

佐伯亥九二

在東京

栗谷信

在東京

渡邊又喜

在東京

稻尾孝樹

在東京

大森貞夫

在東京

飯野榮作

在東京

宮崎五郎

在東京

佐伯亥九二

在東京

栗谷信

在東京

渡邊又喜

<div data-bbox="869 531



日亞國交上一新紀元を劃する

亞國政府派遣訪日經濟使節團

商船あるぜんちな丸で正月早々出發

まだ正式
が出來ず殘念に思つて居ま
す」
まだ任命が
猶ほ亞國通にキンターナ氏に關
する意見を問へば
政府から
出で居な
いでの僕

福間領事歸朝の途へ

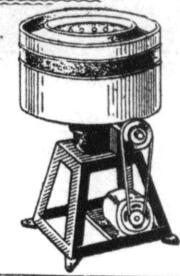
日會主催で送別會を開催

細川通譯官

Juan B. Istilata Ltda

LIMA 1662 U.T. 23-6488
BUENOS AIRES

CASA CENTRAL Y FABRICA
TRES ARROYOS (F.C.S.)



謹賀新年

CASTINEIRA
AVENIDA MONTES DE OCA 1769
U.T. 21-2238
Buenos Aires

布地は豊富、仕立は最新型
お値段は極めて格安
カステイ
ニエイラ
高等洋服店

日本人常顧客澤山あります
月賦支拂の便もあり

カマボコ製造販賣

製造日 火 木 土 曜 日
配達日 水 金 日 曜 日

アベデヤネーダ市

ビルコマージョ街二二二二
電話二〇(ビネイロ)九一二二

ドイツ人葬儀社

葬儀一切の御下命は

ドイツ人葬儀社

自動車及び馬車、晝夜開店

バンコ・ムニシパル

では毎日(日曜、祭日を除く)

左記の品々を競賣す

以上何れも競賣入札を以て

競賣に購入出来ます

競賣場

Banco Municipal
Casa de venta
ESMERALDA 660

NUEVA COCHERIA
ALEMANA
PUEYREDON 1772

U.T. (41) 2694

屋 产 口

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

口 产

水 产

</

Año XVII N° 1080

"EL ARGENTIN DJIJO"

PERIODICO JAPONES FUNDADO EN 1924

Buenos Aires, Lunes 1º de Enero de 1940 SECCION CASTELLANA Dirección: Uspallata 981. U. T. 23-7051

Año 2600 - Año Jubiloso

UNA MISION OFICIAL ARGENTINA VISITARA AL JAPON

Ya en prensa este número, nos enteramos de la gratísima noticia dada a publicidad por el Ministerio de Relaciones Exteriores, que reafirma brillantemente nuestra crónica de relaciones argentino-japonesas, que insertamos en otro lugar.

El gobierno argentino, aceptando la invitación formulada por intermedio de la representación diplomática del Japón, para que un grupo d funcionarios de las distintas ramas de la administración nacional y de figuras representativas de las distintas industrias, se trasladan al Japón para conocer mejor sus manifestaciones más importantes.

Presidirá esa misión de cortesía el ex embajador argentino, señor Federico Quintana, integrada por varios funcionarios técnicos y periodistas.

Este viaje de la misión argentina que llegará a Tokio en medio de la magna fiesta nacional del Japón, constituye un buen augurio para las futuras relaciones argentino-japonesas.

do, también vió en la mujer la tentación, perjudicial para el coraje y el fiel cumplimiento del deber, y aunque la trataban con afecto y consideración no conocida por sus hermanas de otros países del Asia, la mujer japonesa no fué objeto jamás de ese homenaje romántico que los galantes guerreros de la Europa medieval rindieron a su bello sexo. El caballero japonés realizaba sus actos de heroísmo por su lealtad y en cumplimiento del deber, y no por galantería para conquistar la sonrisa de una dama.

De esta suerte, los tres factores —Filosofía china, budismo y feudalismo— combinados, colocaron a la mujer japonesa en situaciones, legal y socialmente inferiores al hombre. Ella no podía ser jefe de la familia; ni poseer propiedades ni formular contratos en su nombre; ni ser tutor de su propio hijo, ni adoptar hijo en su nombre. No tuvo, en fin, el STATUS independiente y estaba excluida del goce y ejercicio de casi todos los derechos.

Pero en el período tercero, durante el cual fué introducida la civilización europea, la educación femenina ha invadido todo el país con el consiguiente beneficio para la elevación de la condición de la mujer. La jurisprudencia occidental ha suplantado la legislación china, y la ley japonesa formó parte de la familia de las leyes europeas, ocasionando una gran revolución social y legal que mejoró la posición de la mujer. Esta reforma fué consumada con la promulgación del Nuevo Código Civil.

(Continuará).

INSTITUTO CULTURAL ARGENTINO JAPONES

Biblioteca Pública — Cursos de Japonés
INFORMACIONES CULTURALES

Calle Uruguay 718

PAGINA DE ACTUALIDADES

Oriente versus Occidente

No hay nada más provocativa e irritante al consentimiento del japonés moderno que la concepción que tienen en el Occidente de que las razas llamadas de color son inferiores a la raza blanca. Acaso, no somos todos descendientes de la creación de Dios, y, en consecuencia, iguales? No puede haber dos orígenes diferentes. La diversidad es originada por las diferencias de climas y condiciones del ambiente que hacen variar el modo de vida —costumbres, hábitos y de alimentación— de los hombres, según la región donde habitan. Esta es la creencia de los nipones de hoy.

Ya en la época de la fundación del Imperio Nippón (660 años antes de Cristo) existía ruta marítima de comunicación entre el Oriente y el Océano, y en la región del actual Canal de Suez vivían poderosos pueblos, según es notorio. De esta antigua civilización, desparramada por esos pueblos grandes, hacia Oriente, hacia el Océano y hacia el Sur, han nacido las civilizaciones posteriores.

A pesar de esta lógica que nos faculta concebir nuestro sentido común, la inquebrantable verdad de la igualdad de los hombres, la realidad es otra. La mayoría de los pueblos del Oriente viven en la actualidad bajo la dominación de Gran Bretaña, Francia, Rusia y otras naciones del Océano, oprimidos y reducidos a una condición miserable de existencia como meros elementos para producir la prosperidad de los despóticos dominadores.

Dice el Canciller Hitler que los ingleses han conquistado la cuarta parte del globo en los últimos tres siglos, porque tuvieron la fuerza poderosa para realizar esas conquistas. Pero yo agrego, que estos ingleses realizaron esas conquistas por el simple uso de esas fuerzas brutales para aumentar sus beneficios, sin miramiento de ninguna clase hacia los pueblos débiles, a los cuales esclavizaron con todo rigor.

No es necesario repetir aquí los pormenores de sus cruelezas y guerras de violencias impuestas a los pacíficos moradores de esos territorios por los ingleses, franceses, holandeses, rusos y otros, especialmente la dominación de la India y la guerra del opio en China, que la historia lo evidencia claramente. Para estos conquistadores no existía ni ley ni razón, sólo la fuerza tenía el derecho de decisión. La expansión rusa, que comenzó casi al mismo tiempo de la expansión de los ingleses, ha conseguido dominar las costas del Pacífico, muchos de los terrenos que, según la teoría de ellos, correspondían al Japón que con anterioridad había descubierto toda la costa oriental de Siberia con la expedición de Mamiya en 1808-9.

Es verdad que los orientales también habían invadido al Océano con anterioridad —las conquistas de Gengis Kan y de Chingis, pero desde que iniciaron la dominación los occidentales, los orientales viven bajo la perpetua opresión desde hace 300 años. Nosotros no pretendemos necesariamente el desalojo de los occidentales del oriente, pero si queremos que los occidentales dejen de considerar a los orientales como sus colonos

perpetuos, que no hay razón alguna para ello. Nosotros no queremos imitar sus pasos: no vamos a aspirar de colocarnos por encima de los occidentales, a los cuales miramos como seres iguales.

Queremos la igualdad de consideraciones y de trato, colocarnos sobre el mismo nivel de humanidad. Este es, pues, el principio de la nueva orden del Asia Oriental que el Japón sostiene y ha iniciado su construcción en el continente asiático. Esta idea no es nueva para los nipones. Es el ideal acaecido desde la fundación del Imperio.

Este ideal de fraternidad universal basado en la justicia universal, fué consolidado durante el aislamiento para su preparación espiritual y moral, y entra ahora en su camino de realización.

El presidente Grant, de los Estados Unidos que visitó el Japón al principio de la vida internacional del Japón, expresó con su sincero sentimiento humanitario, la esperanza de que el Japón llegue a realizar su ideal, conduciendo a los pueblos del Asia para su liberación y progreso. No son pocos los americanos que han vivido en el Japón quienes han cooperado por este trabajo de humanización del mundo y hacia la armonía del oriente con el occidente. Las relaciones de estos dos grandes pueblos del pacífico han sido estrechadas con ese sentimiento noble desde hace cerca de un siglo. Las diferencias de índole económica o política que no faltaron, no han podido jamás alterar la base de esta amistad real.

No obstante esto, el incidente chino, emanada de la acción de los caudillos chinos, influenciados por las potencias interesadas en mantener a los chinos bajo su dominio, y por la hábil propaganda de los chinos, que han querido desvirtuar la verdadera intención del Japón, ha creado en el occidente la creencia de que el Japón seguiría la escuela de las potencias dominadoras del occidente, sindicándole la intención de conquistar y dominar a China. Tanto se ha generalizado tales ideas infundadas que hasta la América comienza a manifestar su duda, al parecer. Digamos, al parecer, porque no es posible que ese pueblo llegue a creer semejante locura, disparate.

A nuestro criterio, si la América es lo que fué no puede dar oído a tales rumores interesados que se propagan intencionalmente.

Los países de las américa que, por la opresión de los europeos debieron luchar con armas para librarse, deben comprender claramente lo que aspiran los pueblos del Asia esclavizados por los blancos con aire de despotismos dominadores.

El Asia, con la dirección del Japón, aspira implantar una condición de cultura internacional no conocida hasta ahora en la historia internacional, que, desgraciadamente, ha estado bajo el único manejo de las potencias occidentales. El mundo del porvenir será una sociedad internacional de verdadera justicia universal, en la que todos los pueblos tendrán voz y voto, siempre tratados con la justicia, de acuerdo con la concepción humanitaria, y no bajo el punto de vista de las potencias occidentales.

El Oriente no hace la guerra al Occidente,

como el Occidente ha hecho y lo hace ahora todavía. El Oriente que seguirá la bandera humanitaria del Japón ofrecerá la fraternidad, brindándoles a todos la igualdad, eso es todo.

Si el Occidente desdeña esta verdad es porque cree que tal cambio le perjudica. Pero es un error. La verdad y el bien no pueden nunca perjudicar a nadie. Lo saben ellos; tienen que saberlo porque han comprendido los principios de Cristo, que también lo es de origen oriental.

Lo único que hace falta es que el Occidente deje de un lado la mal fundada idea de amor propio: Abrir los brazos a los orientales que éstos responderán jubilosamente, amistosamente, para marchar juntos hacia el progreso real de la humanidad.

Almirante Gumpai Sekino

TRIUNFO ARGENTINO

Al terminar el año memorable —porque ha de ser memorable en la historia el año de la segunda guerra europea del siglo XX— de 1939, la Nación Argentina ha obtenido a la faz de la tierra un triunfo significativo que la realza ante la consideración de todas las naciones del mundo. Nos referimos a su actuación en la Sociedad de las Naciones en la que propuso, de acuerdo con su inviolable principio de justicia, imponer la autoridad de la Liga contra la nación agresora, obteniendo el consentimiento unánime de los miembros asistentes a la Comisión encargada de estudiar el asunto.

Sin entrar a examinar ni discutir el detalle del proceso, hacemos presente la importancia del hecho que viene a reafirmar el prestigio de la Liga misma, por la noble inspiración argentina que nadie puede negar.

La Argentina que hace un año dejó constancia de su valor internacional en el Congreso Pan Americano de Lima, ha aprovechado la oportunidad actual para establecer en la Liga de las Naciones la actitud firme que es menester para sostener el principio de la justicia internacional.

Sea cual fuere el destino de la Liga de las Naciones, los buenos principios no pueden sufrir alteraciones, de modo que la acción argentina de 1939 quedará registrada para la posteridad como un antecedente imborrable de la jurisprudencia internacional.

Al celebrar este nuevo triunfo argentino, que tiene por fundamento el principio que encierra en la frase de Saenz Peña: **América para la Humanidad**, formulamos votos porque éste sea el alma del continente americano para siempre.

Sastrería Japonesa

Fundada en el año 1916

de S. Katayama

PIEDRAS 572

U. T. 33-5452

EL JAPON DE HOY

Si la transformación del Japón moderno en los últimos 70 años ha sido grande y sin precedentes en la historia del mundo, la evolución que el Imperio del Sol Naciente realiza en el presente, del cual están sorprendidos los mismos actores, puede llamarce una obra realmente colosal.

El señor Soshi Asahi, autor del conocido libro "El Por qué del éxito comercial del Japón", acaba de publicar otro libro titulado: "La Fuerza Económica del Japón" en el cual expone con inteligencia y erudición el panorama general del Japón de hoy.

Como mejor comentario de la obra, publicamos algunos datos salientes que contiene el libro, que honra al autor y honra al Japón.

Al estallar el conflicto chino-japonés en julio de 1937, se ha dicho con frecuencia en el extranjero, repitiendo el pronóstico que hiciera Lord Lytton en 1931 y que fué todo un fracaso, que el Japón buscaba su propio desastre: que aún cuando tuviese éxito en su empresa militar, ésta le impondría una carga económica tal que lo llevaría al derrumbe social. Japón era considerado inapto, económica, financiera y socialmente, para soportar el penoso esfuerzo de una larga guerra moderna. Esto fué lo que creyó el General Chiang Kai-Shek, y tan firme fué su convicción, que basándose sobre esa teoría supuesta organizó y lanzó su ofensiva contra el Japón. Los hechos han demostrado después que aquello fué un equívoco fundamental. No obstante verse descartada la hipotética presunción, el dictador chino ha persistido — como un anhelo mal fundado — de tal manera que aún después de la caída de Hankow, hizo que declarase que llevaría la hostilidad indefinidamente, en la esperanza de que el Japón no tardaría en agotarse.

El mismo pensamiento o deseo fué expresado en todo el exterior, incluso en los grandes órganos periodísticos más autorizados de Inglaterra y los Estados Unidos: The Times, The Economist, The Manchester Guardian, The New York Times, etc., juicios que fueron reproducidos en todo el mundo, generalizando la creencia de que existía en el Japón la carencia de artículos y las dificultades económicas y financieras sugeridas en las informaciones chinas habilmente preparadas, causando, por otra parte, sorpresas a los turistas extranjeros que al llegar al país observan atónitos la abundancia y prosperidad de los negocios del Japón.

Mientras tanto, sin pérdida de tiempo, tras de las victorias militares en el territorio chino que quiere sanear y reorganizar por el bien de los mismos chinos, ha iniciado ya su obra de reconstrucción china con sus propios recursos.

RIQUEZA NACIONAL

Pocos son los que prestan la atención a las cifras que son señales de condiciones de progreso o decadencia de una nación. El de-

sarrollo de la riqueza nacional del Japón, denota la actividad extraordinaria de ese país en este siglo y muy particularmente en los últimos años, a pesar de atravesar el mundo la crisis que fué y es universal.

DESARROLLO DE LA RIQUEZA NACIONAL

1913	32.043.000.000	Yens Indice:	100
1919	86.077.000.000	"	268
1924	102.341.000.000	"	318
1930	110.188.000.000	"	343
1931	96.839.000.000	"	340
1934	140.228.000.000	"	438
1937	201.144.000.000	"	628

La riqueza del Japón ha crecido para sextuplicar a la de antes de la guerra mundial y desde el año 1931, año de aguda crisis, sin perjuicio de afrontar el incidente manchuriano y la guerra comercial de las naciones extranjeras, ha sido duplicada, y sigue en el mismo tren extraordinario de progreso en la actualidad.

REDITOS NACIONALES DE JAPÓN

En concordancia con el aumento de la riqueza, las entradas del pueblo han seguido el mismo peso. He aquí las investigaciones del profesor Dr. Takahashi:

1930	10.635.000.000	de Yens
1935	14.795.000.000	de Yens
1937	18.801.000.000	de Yens

EL AHORRO NACIONAL

Es sumamente difícil la investigación del ahorro general de la nación. El señor Asahi ha realizado un estudio prolífico sobre la base de las investigaciones de instituciones autorizadas, llegando a la conclusión de que en los siete años — 1931-37 —, el ahorro ha alcanzado la suma de 27.840 millones de yens, que resulta un término medio anual de 27% sobre la entrada general. Según la Encyclopædia Británica, el pueblo americano ahorra alrededor de un séptimo (14%) de su entrada por año. El japonés ahorra casi el doble de los americanos.

DE LAS PRODUCCIONES

Entre el año 1930 y 1938, el valor de las producciones en el Japón propiamente dicho, lo mismo que en sus dependencias, ha sido duplicado, siendo notables, además, los incrementos paralelos habidos en las exportaciones e importaciones, así como en el consumo interno de las mercancías.

(Producción en millones de Yens)

Año	En Japón	En las colonias	Total
1930	12.348	1.803	14.151
1934	15.474	2.498	17.972
1938	27.057	3.921	30.978

INCREMENTO PROPORCIONAL EN EL COMERCIO EXTERIOR Y EN EL CONSUMO

(En millones de Yens)

Comercio Exterior		Consumo	
	Export.	Import.	Consumo
1930	1.510	1.690	14.321
1934	2.258	2.400	18.114
1938	2.896	2.836	30.918

La importancia de las colonias o dependencias en la vida económica del Imperio se cifra en la contribución que éstas aportan con sus producciones de arroz y azúcar, con

los cuales completa las necesidades de sustancias alimenticias en todo el país, sin depender del extranjero. Y los recientes desarrollos en las industrias pesadas y explotaciones de minas en Chosen y en Taiwan, facilitarán grandemente la realización del programa de la expansión industrial del Japón. Por otra parte, las colonias japonesas, especialmente Chosen y Taiwan, han dejado de ser una carga para el fisco del Gobierno Central, convertidas en un haber en la economía del Imperio, además de constituirse en mercados de consumo de las manufacturas de la madre patria.

CAPACIDAD FINANCIERA DEL JAPÓN

Desde 1932, año de aguda crisis, hasta 1936, no ha habido aumento en impuestos, excepto la creación de recursos nuevos provenientes de las grandes ganancias comerciales, que produjeron para el fisco; 26 millones en 1935 y 44 millones para 1936, que para el estudio comparativo del cuadro siguiente no están incluidos, el aumento natural de las rentas nacionales para el fisco, marcan las siguientes cifras de índice tomando como base 100 del año 1932: — Año 1936: Impuestos sobre réditos, 203; Patentes de Comercio, 208; Impuestos sobre "Sake"-bebida aleohólica, 124; Impuesto sobre azúcar, 119; Derechos de aduana, 165; Otros impuestos, 104.

PRESUPUESTOS DE JAPÓN

Igual que las demás potencias, el Japón ha tenido que aumentar sus gastos de armamentos para proveerse de las necesidades de la defensa nacional, además de las crecientes demandas de la administración, aun sin contar con los gastos extraordinarios de la guerra en China.

Desde Julio de 1937, hasta 31 de marzo de 1939, los gastos sancionados por el parlamento para las expediciones militares en China ascienden a 7.380 millones de Yens y para el año 1939-40 (hasta 31 de marzo) otros 4.600 millones, que hacen un total de 11.980 millones de yens, sin contar los gastos ordinarios de la administración que en el año fiscal de 1938 fueron de 3.514 millones y en 1939, la suma de 3.694 millones, según el presupuesto.

Los recursos ordinarios del Gobierno, por ejemplo del año 1938, han sido obtenidos del siguiente modo: 1.742 millones en impuestos, 626 millones de diversas entradas y 1.008 millones en empréstitos.

Un país de 70 millones, de habitantes con la riqueza nacional de 200.000 millones y rentas generales del pueblo que están estimadas en 18.800 millones anuales, no puede tener dificultad para hacer frente a la emergencia nacional que demanda de la nación alrededor de 5.000 millones de extras.

Los nuevos empréstitos que significan nuevos impuestos, no pueden afectar a un pueblo activo y próspero como el del Japón cuya carga actual no es de ninguna manera pesada, si se la compara con las de otras naciones:

CUADRO COMPARATIVO DE LOS IMPUESTOS PER CAPITA

(Convertidos todos en moneda japonesa, en base sobre las publicaciones oficiales de los respectivos países). —Correspondientes al año 1935—.

Japón, 26.22; Reino Unido, 331.09; Estados Unidos, 279.02; Alemania, 286.17; Francia, 152.36 (año 1932).



Gran Bretaña y Francia han gastado en la última guerra, un término medio de 87,8% y 90,7% de las rentas nacionales del año durante 4 años. Si el Japón tuviera que gastar el 90 % de las entradas de la nación, podría gastar anualmente, para la guerra, hasta 16.720 millones de yens.

TRANSFORMACION INDUSTRIAL DEL JAPON

Nada más importante como interesante que la reciente transformación del Japón como país industrial, especialmente su aspecto de la industria pesada, evolución que ningún extranjero pudo prever. Aun en el año 1930, el profesor John E. Orehard de la Universidad de Columbia, que fué a estudiar el estado industrial del Japón, decía: "El Japón ha hecho grandes progresos en la industria, si se toma en consideración la pobreza de sus recursos, pero hoy por hoy, este país no ha llegado todavía a un estado industrial comparable al de los Estados Unidos, Gran Bretaña o Alemania. Las posibilidades de su industrialización en gran escala son limitadas. El porvenir de la industria japonesa parece descansar en las industrias livianas..."

Pero la realidad es lo siguiente: En la actualidad las industrias textiles que antes de 1930 eran las principales del Japón, ha cedido su puesto en 1933 a las industrias pesadas. He aquí su evidencia:

EVOLUCION DE LA INDUSTRIA JAPONESA

PORCENTAJE POR GRUPOS

Año	Textiles	Pesadas	Otros
1930	36,5%	35,3%	28,2%
1933	37, %	38,9%	24,1%
1936	29,8%	49,2%	21,0%
1938	24,8%	55,7%	19,5%

En 1936, el profesor de la Universidad de Liverpool, después de un viaje de estudio al Oriente, describió la industria pesada del Japón, mencionando la evolución de que nos hemos cerciorado antes, maravillado de los grandes progresos, dice... "Pero, de todas las industrias, las que han realizado progresos espectaculares son las metalúrgicas y químicas. Las producciones de acero y maquinarias, antes muy insignificantes, son hoy muy considerables, y de los hilados de seda artificial, Japón es el principal rival de los Estados Unidos. No solamente las grandes empresas han brotado en los últimos cinco años de actividad colosal, sino también múltiples y pequeñas industrias, especialmente en los ramos de fabricación metálica, eléctrica, etc., de variados productos. Hace 15 años los japoneses utilizaban técnicos extranjeros, quienes se quejaban de los técnicos y obreros japoneses. Hoy todos los técnicos son japoneses y muy hábiles con obreros adiestrados y preparados científicamente que rinden trabajos muy eficientes y producen excelentes productos a un costo sumamente barato, a pesar de obtener muchas de las materias primas en el extranjero todavía".

En 1937, Japón ha sobrepasado a los Estados Unidos como el principal productor del mundo en hilados de seda artificial con sus 151.500 toneladas métricas contra 141.630 de los Estados Unidos; lo es también de Sulfato de amonio y de celuloide. Del ácido sulfúrico, soda cáustica y cemento, lo es el segundo o tercero del mundo. En acero, ocupaba el sexto lugar en 1930, con 2.328.000

toneladas métricas pero en 1933, sobre pasó a Bélgica, para llegar al quinto rango y en 1936 su producción alcanzó a 5.150.000 toneladas métricas. Después del comienzo del incidente chino-japonés no se han publicado datos, pero juzgando por el consumo del material, la producción debe haber aumentado notablemente para satisfacer la gran demanda existente.

El balance del comercio de maquinarias arrojó por primera vez en la historia del comercio japonés un saldo favorable al Japón en 1936. Ha llegado así a ser el país exportador de maquinarias:

PRODUCCION, EXPORTACION E IMPORTACION DE MAQUINARIAS

(En millones de Yens)

Año	Produc.	Export.	Import.
1930	615	41	124
1932	543	43	96
1934	1.082	138	147
1936	1.609	198	159
1937	1.860	254	249

VALORES DE LAS PRODUCCIONES INDUSTRIALES POR GRUPOS PRINCIPALES

(En millones de Yens)

Año	Textiles	Pesadas	Otras	Totales
1930	2.173	2.097	1.692	5.962
1934	3.167	4.135	2.088	9.390
1936	3.654	6.034	2.569	12.257
1938	3.662	8.190	2.857	14.709

Las producciones del Japón propio en los últimos años se caracteriza en la creciente importancia que cobra la industria manufacturera. En 1930, la producción industrial ocupaba el 65 % de la producción total del país; en 1934, el 76 %, y en 1937 y 1938, se estima que lo proporciona alcanza a 80% en números redondos.

PRODUCCION JAPONESA POR GRUPOS DE INDUSTRIAS

(En millones de Yens) Datos del año 1938

Industrias manufactureras	21.478	79%
Agricultura	3.930	14%
Minas	842	3%
Bosques	396	2%
Aquáticas - Pesca, etc.	413	2%

En los ocho años de referencia, la producción total del Japón ha tenido un aumento de 120 por ciento en cuanto a su volumen, su valor casi se ha triplicado - (270%).

DE LOS STANDARDS DE VIDA

Interesantes observaciones del Sr. Asahi

Es curioso observar que el mundo se ha interesado acerca del standard de vida de los japoneses, especialmente de sus obreros, justamente cuando la exportación del Japón aumentó en los mercados del mundo, desapareciendo de repente su curiosidad, cuando disminuyó su exportación, por causa de la guerra comercial de las potencias y sus aliadas. Se comprobó luego que todas las propagandas contra el Japón que han hecho las naciones industriales interesadas, estaban basadas por el interés de perjudicar su comercio, sin ningún propósito de averiguar la verdad. Pero, más tarde, cuando vieron que, a pesar de la injusta guerra de que fué víctima el Japón, este país volvió a triunfar en todas partes, incluso en los mercados de los principales países industriales, enemigos de la industria japonesa, tuvieron que

revisar sus falsas imputaciones, convenciéndose que no tenían razón. La organización, capacidad, métodos adecuados y la racionalización eran las causas de la victoria japonesa. Los periódicos de reputación, tales como The Times, The Economist, The Manchester Guardián, etc., han tenido que reconocer la realidad. Pero el público trabajador que con facilidad se entera de las informaciones que consideran de su interés, no están preparados para leer diarios o libros de cierta importancia de carácter serio, y continúa hoy creyendo lo que les hicieron saber los diarios baratos con grandes títulos acerca de la vida de los obreros japoneses, que eran falsos.

Más que argumentos de polémica, informaciones producidas por ellos mismos, han de servir para rectificar sus juicios erróneos. He aquí la publicación de la Liga de las Naciones, por conducto de la O. I. de Trabajo de Ginebra, relacionada con el standard de vida de trabajadores. La Liga de las Naciones, arrepentida del delito cometido, se ha despertado recién en 1938 para estudiar este asunto. Si la liga hubiera escuchado al Japón en 1930, investigando la realidad de las cosas, cuantas desgracias y conflictos, tal vez las guerras hubiera salvado.

"La comparación de las condiciones del nivel de vida de los trabajadores es cosa muy difícil. El estudio es tan complejo, hay que tomar en consideración tantas cosas, porque es un asunto social de los pueblos de diferentes costumbres, climas y modo de vida. Suelen hablar del standard de vida con demasiada facilidad, sin comprender su verdadero sentido. Hay muchos standards de vida dentro del mismo país o comunidad".

El informe cita, después, ejemplos de diversos países:

"En Nueva York, gran ciudad de opulento país, por lo menos la cuarta parte de la clase de empleados y de la raza blanca, viven mal nutritos. En los Estados de Oregon y Portland, el 50 por ciento de la población de la clase de empleados está faltó de nutrición adecuada.

Entre los cosecheros blancos de la región sur-este del país, el 90 por ciento de sus hijos y 88 por ciento de los adultos están en las mismas condiciones. En los seis millones de hogares no agrícolas y cinco millones de familias agricultores, o sean más de la tercera parte de la población americana, están por debajo del nivel del standard de vida americana. En 1930, el 4,3 por ciento de la población de menos de 10 años eran analfabetos".

"En Polonia, el 29 por ciento de la clase de trabajadores no ganaban lo suficiente para alimentarse adecuadamente, el 37 por ciento de las viviendas urbanas y el 51,5 por ciento de rurales, tenían término medio una pieza para la familia. El analfabeto llegaba a 23,1 por ciento.

En Bombay, en India Británica, el 33 por ciento de la población vivía en 1936, a razón de 5 personas en una pieza y 15.000 personas ocupaban una pieza por 20 individuos o más. La mayoría de los habitantes de esta ciudad duermen en las calles y solamente el 4 por ciento viven en condiciones de decencia doméstica. Más del 90 por ciento de la población de la India Británica es analfabeto. Un tercio, y en algunas partes la mitad de la población, no consume la alimentación suficiente".

El mismo informe de la Liga, refiriéndose al Japón, dice:

"En 1.107 familias trabajadoras en diez diferentes ciudades del Japón en 1935-1936, solamente el 10 por ciento gastaba para su alimentación sumas que no pueden proporcionarles nutrición suficiente para mantener la buena salud y eficiencia. Un 16 por ciento del total de los niños estaban mal alimentados. El 29,7 por ciento de las viviendas eran del nivel inferior al standard correspondiente. El problema del analfabetismo no existe en el Japón. Hay 12.557.931 familias en el Japón. Cada hogar, término medio, consiste de 3,42 piezas. Cada familia en Japón consta de 4,98 personas, término medio. Viven pues, en cada pieza, 1,46 personas.

El informe de la O. I. de Trabajo no contiene la investigación pertinente a Inglaterra. Pero podemos citar el estudio publicado por la Universidad de Bristol en enero de 1939, sobre las condiciones de las familias obreras de la ciudad de Bristol.

"El 11 por ciento de las familias de la clase trabajadora y el quinto de sus niños viven por debajo del nivel del standard mínimo de la vida.

En este minimum no existe siquiera el "lujó" de diarios, tabaco, muebles y útiles caseros, ni gastos del día de descanso". El Director de la Comisión de Investigaciones, Mr. Herbert Tout, dice:

"Uno de los grandes males de la miseria está comprobado así que repercuta a la generación venidera. Es realmente doloroso saber que el 20 por ciento de los hijos de los trabajadores viven mal por causa de que sus padres no perciben suficientes entradas para alimentarlos adecuadamente".

Estas confesiones o expresiones de franca sinceridad harán la obra bienhechora, no sólo a los propios interesados, sino para la armonía de todos los pueblos.

Relaciones Argentinas-Japonesas en 1939

Ha sido un año de intensa actividad el que acaba de festejar, en lo que respecta a las relaciones argentina-japonesas.

Se inició el año con el nombramiento del nuevo ministro plenipotenciario de la Argentina ante el Gobierno de Tokio, cargo que le fué confiado al Dr. Rodolfo Moreno, una personalidad descollante en el mundo político intelectual del país. Este gesto del Presidente Dr. Roberto M. Ortiz fué recibido con unánime aprobación de la opinión de la Argentina, siendo apreciado en su justo



EXPOSICIÓN DE ARTE INDUSTRIAL

Fuó un éxito la Exposición realizada en la Galería Müller en 1939, organizada por la Federación Nipona de Artes Industriales.

En la fotografía aparece S. E. el ministro del Japón, señor Iwataro Uchiyama, leyendo su discurso.

valor por el Gobierno y pueblo del Japón, como una manifestación de este país hacia el prestigio universal del Imperio, que redundará en beneficio recíproco, facilitando una mayor vinculación entre los dos países.

Sin perjuicio de la paralización del intercambio comercial que motivó diversos comentarios, que, en realidad obedece a la situación anormal de la economía mundial, ha habido movimiento en ambos bandos que no sólo evidencian la firmeza de la simpatía igualmente progresistas y que no conocen prejuicios.

La representación diplomática del Japón ha trabajado empeñosamente, con la colaboración de las autoridades competentes de la Argentina, en la preparación de planes concretos para el futuro desenvolvimiento mutuo de los pueblos japonés y argentino, del intercambio comercial que, como es notorio, está destinado a un desarrollo que será bien importante cuando las condiciones económicas mundiales vuelvan a su cause normal.

La Legación Japonesa en la Argentina que desde hace varios años está casi equiparada a una embajada, con sus agregados comerciales, agrícola, naval y militar, será en este año promovida a Embajada, según ha sido acordado por el Gabinete Imperial.

Numerosas han sido las misiones y delegaciones, viajes de estudio realizados por profesores y hombres de negocio del Japón que visitaron a la Argentina, mientras que por otra parte continuaron en aumento los turistas argentinos que fueron al Japón.

Muy halagüeño ha resultado la realiza-

ción de la Exposición Industrial, organizada por la Federación Nipona de Artes Industriales, lo mismo que la Exposición de Pinturas Contemporáneas del Japón, llevada a cabo por el señor Fukunaka, mereciendo ambas elocuentes manifestación de aprobación y calurosas felicitaciones de parte del público argentino.

Uno de los hechos inolvidables fué, sin duda la llegada del nuevo motonave "Argentina Maru" de la Osaka Syosen Kaisya, de 13.000 toneladas especialmente construido para la línea Japón - Río de La Plata, que inauguró su servicio en Julio de Kobe. La incorporación de esta unidad que será seguida con un barco gemelo, el Brasil Maru, mejorará grandemente la comunicación entre los dos países.

A bordo del mencionado buque vino la misión Comercial encabezada por el señor Kakichi Nezu, miembro de la Alta Cámara de la Dieta Imperial del Japón.

No menos importante y de mucho efecto fué la visita del avión Nippón del diario Osaka Mainichi, tripulado por periodistas, en su misión de buena voluntad alrededor del mundo, siendo recibido aquí con entusiasmo y franca manifestación de cordialidad.

La misión deportiva compuesta por dos profesores de "Ju-do" despertó como era de esperarse mucho interés entre los círculos deportivos argentinos. Las visitas del tennismán y atleta conocidos fueron festejados en sus respectivos círculos, dejando gratos recuerdos.

El año pasado tuvo variados visitantes del Japón. Uno de ellos, el señor Masao Koga, compositor de músicas populares del Japón, aficionado al Tango, quien hizo conocer públicamente sus melodías. También estuvo el conocido tenor Japonés, Joshiie Fujiiwara, que ofreció algunas audiciones de sus canciones de Folklore japonés.

Las exhibiciones de películas culturales facilitadas por la Legación del Japón, dadas en salones de teatros y salas de instituciones culturales y educacionales fueron muy favorablemente acogidas, prestando servicios muy útiles para la propaganda cultural y difusión de conocimientos de cosas del Japón que el público argentino aclama con sinceridad.

La música japonesa que desde que por vez primera cantó en Buenos Aires el tenor Fujiiwara en 1937, se hizo popular entre los verdaderos aficionados de la música, ha producido notables ejecutores y profesionales que han dominado las canciones japonesas. Uno de los extraordinarios efectos fué sin duda,



DR. KOTARO TANAKA EN BUENOS AIRES

Un acontecimiento cultural de trascendencia ha sido la presencia en Buenos Aires del ex decano y profesor de la Universidad Imperial de Tokio.

La fotografía que publicamos fué tomada en el decanato de la Facultad de Filosofía y Letras.

la aparición al público de la soprano Argentina Jolly Greco, que tuvo mucho éxito. También fué muy felicitado por los entendidos el barítono Juan Broussalis, quien después de muchos años de dedicación, cantó en diversas ocasiones canciones japonesas, por su dirección correcta e interpretación artística.

Ha llamado la atención la presentación de la guitarra japonesa que, como obsequio del fabricante japonés, fué entregada al profesor argentino Ricardo Muñoz.

Merece el reconocimiento público las gentiles actuaciones de las alumnas de la Escuela Japonesa de la Asociación Japonesa que con toda buena voluntad acudieron a las solicitudes para amenizar actos públicos con sus danzas japonesas que tanto agradan a los argentinos.

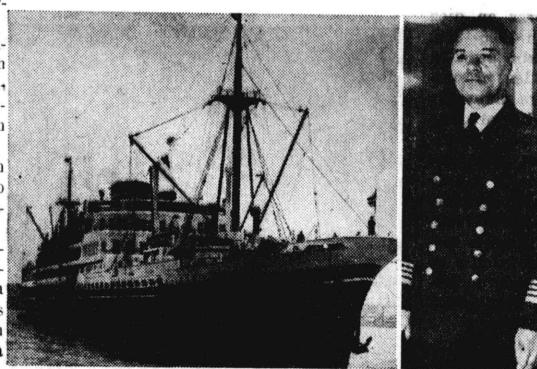
Las publicaciones de noticias e informaciones japonesas en los diarios y revistas argentinas aumentan en número cada vez más notándose, día a día la mejora en su selección, gracias a la dedicación los agentes encargados de distribuir informaciones fidedignas.

Las exposiciones del arte floral del Japón iniciada hace dos años por la señora Beatriz T. Uchiyama, quien estuvo muy feliz en la realizada el año pasado, ha tenido cooperadora indirecta en la difusión de su conocimiento práctico en la Sociedad de Damas de Ultramar que ha organizado clases y demostraciones al público del arte de arreglar flores.

El Instituto Cultural Argentino-Japonés ha realizado obra fértil en su noble afán de estrechamiento cultural argentino-japonés. Sus cursos del idioma japonés han sido muy concurridos y sus conferencias públicas altamente calificadas. Ha prestado su cooperación en todo lo que fuera solicitado por la legación del Japón o por el agente de la Kokusai Bunka Shinkokai, contribuyendo de ese modo a la obra de difusión cultural del Japón, que el público reconoce y aprecia.

En 1939, la obra cultural de mayor transcendencia ha sido, seguramente las conferencias del Dr. Kotaro Tanaka que están frescas a la memoria de todos nuestros lectores.

El regreso del primer becado argentino que estudió en Japón, Dr. Victorio Franceschini, ha de merecer ser recordado especialmente. El primer intelectual que ha estudiado



"ARGENTINA MARU"

Nuevo moto-nave "Argentina Maru", que llegó en su viaje inaugural en agosto de 1939, trayendo a bordo una misión comercial presidida por el senador señor K. Nuzu.

A la derecha, el comandante, veterano de la O. S. K.

do a nuestro país, que ha aprendido a amar y comprender nuestros modos de pensar, no bien llegado a su país, ha iniciado el trabajo de divulgar sus conocimientos entre sus connacionales. La obra del profesor Franceschini será fecunda.

El Sr. Takas Yano ha constituido una empresa de intercambio de películas japonesas y argentinas. Fuera de sus propósitos comerciales el asunto tiene interés en cuanto al hecho de que tales intercambios redundan en beneficio recíproco de conocimientos culturales.

La aparición de la revista mensual Oriente y Occidente que dirige el Dr. A. Pugnalini, es un órgano que resulta útil para la propagación de nociones orientales mezcladas con las del Occidente o de la Argentina. Sigue, pues, en el fondo el mismo fin de nuestro diario.

El Congreso Postal Universal de 1939 que fué celebrado en Buenos Aires dió la oportunidad para que concurrieran los delegados nipones. Los delegados no sólo se distinguieron en las sesiones del congreso, sino que con su larga estadía en este país, tuvieron el tiempo suficiente para conocer bien a la Argentina, con lo cual contribuyeron para difundir los conocimientos argentinos en el Japón.

Acaban de llegar de regreso del viaje de turismo y observación de Japón, realizado por invitación de la Dirección del Turismo del Japón las profesoras secundarias de la Argentina, especialmente nombradas por el Ministro de Instrucción Pública. Todas vienen encantadas de nuestro país. Estas profe-

soras constituyen desde hoy un haber importante para las relaciones argentinas-japonesas, lo mismo que los becados que regresan, porque con su conocimiento real nos ayudaran a divulgar la verdad de las cosas del Japón entre los argentinos.

Bien numerosa han sido las publicaciones informativas y culturales llegadas del Japón o editadas en Buenos Aires, pero las conferencias de G. Yoshio Shinya pronunciadas en la Facultad de Filosofía y Letras que fué publicado en forma de libro por el Instituto Cultural Argentino Japonés con el título de "Los Ideales del Japón" ha merecido la más amplia aceptación en la Argentina.

La Asociación Japonesa en la Argentina que preside el Sr. Nishizawa ha tenido un año de labor extraordinaria que honra a la colectividad japonesa.

Fué un acto memorable la demostración organizada para exteriorizar la gratitud al gran amigo del Japón, almirante M. Domecq García.

TORMENTA

por Tōson Shimazaki

Fragmento de su novela ARASHI, escrita en 1926, que es su autobiografía

Yo me alquilé una casita en el barrio de Azabu, donde con la ayuda de una criada me instalé el hogar para mí y para mis tres niños: Tarō, Jirō y Saburō, y mi hija Sueko. Con cuatro chicos que crecen bajo mis cuidados, la casa resultaba muy chica y apretada. Cuando me mudé a este lugar, primero traje conmigo solamente a los dos varones mayores, dejando los otros dos al cuidado de otras personas. A su debido tiempo, sin embargo, llamé a mi lado a la pequeña Sueko.

Tarō era un niño de buen genio. Estaba en la edad en que pronto necesitaría vestirse el uniforme de la escuela media. Jirō, en cambio, estaba todavía en la edad de traerse, de manera que, pobre Sueko que acababa de unirse con su padre y sus hermanos, se convirtió en el blanco de sus dialadas, locuras de chiquillo, que la hacía llorar a menudo. En cada una de estas escaramuzas yo hube de intervenir para calmar,

Kokusai Bunka Shinkokai

(Sociedad de Fomento de Cultura Internacional)
TOKIO. (Japón)

Agenor en Buenos Aires: G. YOSHIO SHINYA

RECONQUISTA 336



MISIÓN DE BUENA VOLUNTAD

En septiembre, en plena primavera, llegó a Buenos Aires, el avión "Nippon" de 100 x 100 japonés, tripulado por una misión de amistad presidida por el señor Takeo Ohara, representante de los diarios "Osaka Mainichi" y "Tokio Nippon" e integrada por los pilotos Junro Ueda y Shigeo Yoshida.

aquietar y apaciguarlos. Debí, asimismo, ocuparme de pequeños detalles domésticos de estos niños huérfanos de madre, desde la selección de sus ropas hasta del menú de su dieta y otras menudas necesidades de la vida. Era justamente cuando la ciudad estaba cargada de atmósfera tempestuosa después de la revuelta del asunto del arroz, que había dejado una penosa impresión en los corazones de los hombres, y cuando circulaba el rumor de una huelga general de los tranviarios de la capital. "En el hogar, en la calle — en todas partes — ruge la tormenta", me hizo pensar.

Poco después, mandé por mi hijo menor, Saburó, que había sido dejado al cuidado de una ama de leche, haciéndome cargo de su crianza. No hace diferencia alguna, cuidar tres niños o cuatro, para quien ha de ocuparse de ellos.

Fué así, llena de dificultades, que hube de mantener mi existencia, luchando contra la enfermedad crónica y regañando y aplacando a los niños. Estos, mientras tanto, prosiguieron con sus propias vocaciones conforme iban creciendo. Yo pensé en encaminarlos, cada uno según su temperamento, que difiere de uno al otro, lo más adecuado posible a su carácter. Taró, el mayor, que era un chico de pocas palabras, más bien tímido, para fortalecer su carácter, lo dispuse que fuese agricultor. Le adquirí un campo en mi pueblo natal, con una casa y terreno suficiente para el trabajo solitario, y el monte que puede proveerle leña para el fuego. Jiró y Saburó entraron al estudio del arte especializado en la pintura occidental. Sukeo ingresó al liceo de señoritas y encontró a su gusto la costura y tejido. Saburó era, por naturaleza de temperamento fogoso, violento, pedía constantemente cosas nuevas, y poseía una técnica y mentalidad artística completamente opuesta a la de Jiró. Nunca mostraba su trabajo a su hermano, ni tenía curiosidad para conocer lo que hacía éste.

Los niños se hallaban reunidos en el "Chanova", en donde se encuentra colgado un reloj viejo, midiéndose uno tras otro la talla contra la columna de madera del rincón del cuarto. Todos se mostraban sorprendidos al notar lo mucho que había crecido Jiró, que es el más alto de la casa, pues por poco su cabeza toca el "Kamoi" o dintel de las puertas corredizas. Es ya más alto que Taró, que es mayor, quien se encuentra ahora, como en otros años, venido especialmente del campo para recibir el año nuevo en compañía de sus familiares.

La Columna del "Cha-no-ma" (literalmente, cuarto de té, pero que es el living-room de los ingleses) está situada en el pequeño corredor que sirve de pasaje entre el "Genkan" o Hall de entrada, con la cocina. Cada candidato para la medición, era puesto de espaldas contra la columna. Había un bulto, hablan todos: "No vale ponerse de punta de pie"; "ponte la cabeza derecha"; "fulano creció tantos centímetros", etc., mientras hacían la anotación correspondiente con lápiz sobre la columna...

Nota de la Redacción: — El señor Tósón Shimizaki ha enviado tres novelas cortas elegidas por él mismo, solicitando su traducción al castellano y encomendando su trabajo al señor G. Yoshio Shinya, quien actuó en calidad de intérprete en el Congreso de los P. E. N. Clubs en 1936, cuando el célebre novelista estuvo en Buenos Aires en calidad de delegado del Nippon P. E. N. Club.

INFORMACIONES ARGENTINAS

Extensión del Territorio:

2.785.492 kilómetros cuadrados. La Argentina ocupa el cuarto lugar, por su extensión, en la América, y el octavo en el mundo.

Superficie apta para el cultivo, incluso tierra agrícola y de pastoreo: 159.000.000 de hectáreas. Inapta para el cultivo: 14 % de la extensión total del país.

Población:

13.000.000 en número redondos. Hombres: 53,3 %. Mujeres: 46,7 %. Urbana 74 %. Rural: 26 %. Crecimiento vegetativo de la población: 16 por mil.

La población de Buenos Aires y sus alrededores: 3.500.000.

Distribución Étnica:

Población nativa de descendencia europea: 77,4 %. Mestizos: 3,1 %. Población extranjera: 19,5 %. Natalidad: 24,03 por mil (1937). Mortalidad: 11,94 por mil (1937). Densidad de la población: 4,6 habitantes por kilómetro cuadrado.

Religión:

El estado sostiene el culto católico; pero la libertad de cultos está garantizada por la Constitución Nacional.

Líneas Ferroviarias:

42.000 kilómetros.

Costas de Ríos y del Océano:

5.700 kilómetros.

Caminos abiertos:

409.813 kilómetros.

Automóviles y camiones:

387.000.

Radio Telefonía:

48 estaciones trasmisoras públicas y 769 transmisiones particulares.

BUENOS AIRES CUENTA CON 8.000 MILLONES DE PESOS EN INMUEBLES

Los estudios realizados por la Municipalidad arrojan el valor total de los inmuebles particulares de esta capital — terreno y edificios — que hacen ascender a 8.000 millones de pesos. Entra en esta estimación los valores de los terrenos que ocupan las 11.415 manzanas, comprendidas en más de 250 mil propiedades.

Grandes edificios:

La gran ciudad sudamericana cuenta con grandes edificios de propiedad particular que están a la altura de los edificios públicos. El más importante es el del Banco de Boston, \$ 7.265.000; Compañía Sud Americana, 6.762.000; Galería Güemes, 6.100.000; Gath y Chaves, central, 5.307.000, id anexo, 4.788.000; C. A. D. E., 5.278; Harrod's, 5.044.500; Shell Mex, 4.804.000; Transradio, 4.741.000; Banco P. Argentino, 4.699.000; Kavanagh, 4.416.000, etc.

La manzana más valiosa es, por su valor del terreno, la que comprende entre las calles B. Mitre, Florida, San Martín, y Cangallo, que representa 22.323.000 pesos.

Las esquinas más costosas son: la del Banco de Boston y las de Florida y Cangallo, valuadas en 2.100 pesos el metro cuadrado

LLEGO UN REPRESENTANTE DE LA DIRECCIÓN DE TURISMO

Por avión, vía Nueva York, llegó el viernes último, el señor N. Yamaguchi, representante de la Dirección del Turismo del Ministerio de Ferrocarriles del Japón.

REGRESO DE LAS PROFESORAS ARGENTINAS QUE FUERON AL JAPÓN

El 28 de diciembre, a bordo del "Argentina Maru", regresaron sanas y contentas, las profesoras argentinas que visitaron el Japón por invitación especial de la Dirección del Turismo del Imperio.

En nuestro próximo número, haremos reportajes correspondientes.

CUADROS Y CARÁCTERES SNOBS

(Escenas contemporáneas de la vida Argentina)

por el Dr. Juan Agustín García

(Continuación del número anterior.)

recordaba don Pedrito, el cerdo fino, ejemplar con vetas rosadas adquirido en Palermo; vivaz y con ardores, comilón, y no obstante su nobleza tenía una debilidad por los charcos y los desperdicios; su gallo mimado, altanero, gordo, majestuoso, de orgullo y aplomo en sus gestos y aptitudes, muy imperiales. Al verla llegar, por las mañanas, Sultán se acercaba seguido de su magnífico serrallito de pollitas tiernas y sábrosas, sumisas, humildes y obedientes; unas esposas ideales, que por nada dejaron de poner sus huevos cotidianos, de un blanco puro, como de marfil. Y Sultán cantaba su himno triunfal... Todo ese mundo pertenecía a un tiempo que se alejaba a toda prisa de su vida actual; eran simples recuerdos muy vagos. El hotelito, el amueblado, las partes de domicilio, el automóvil, las visitas, la organización del servicio; esa nueva existencia de ciudad, con sus teatros, cinematógrafos; esta atmósfera de Buenos Aires tan excitante y activa, habían borrado en menos de un año todos los surcos que dejó en su alma el penoso pasado de fatiga, sin otros ideales que esos que caben en una cabaña o en un gallinero.

Gastón, el "maître", se presentó muy correcto, erguido, casi teso, y con una expresión de modestia algo risueña, que contrastaba con su porte gentil y mundano. Traía su libreta con todos los datos necesarios para ilustrar a la señora. Desde luego el capitán del "chef" occasionó un verdadero susto de asombro a doña Antonia: doscientos pe-

AMPARAS "YAMADA" DE CALIDAD



En venta en las buenas casas del ramo.

sos de sueldo mensual y cincuenta diarios de mercado, sin contar los extraordinarios, el vino y el almacén. Antonia, con su frente ceñuda, reflexionaba, en un ardor concentrado, sobre esos valores. Volvió a ver en su recuerdo a don Pedrito y a su prole, a Sultán y su serrallito, y una indignación que crecía hasta rebasar, se apoderó de su alma. Esto es un robo! Gastón, el sueldo de un peón de campo, el valor de una ternera, por día! Su "chef", agregó con dos efes, debe ser un escapado de la cárcel!

Gastón se inclinó, respetuoso y sonriente, y con toda prolíjidad explicaba los misterios de la cocina; el estudio y el arte que representan un pavo relleno a la catalana, una langosta con su cortejo de salsas, hasta el simple "roast-beef" en punto, sangriento y dorado. Por otra parte, si la señora quería imitar a los Atkinson Gómez, necesitaba un "Chef", a pesar de ese derroche en apariencia, porque cuando viera desfilar esos primores, verdaderas obras maestras en su género, los talentos de Renato se impondrían a su consideración. Además, al confiarle la

señora la dirección y manejo de su casa, debió pensar que esa vida mundana implica un margen de exceso de los gastos, que le dan su encanto, su prestigio y su brillo. Renato ignoraba la economía, y hablarle de esas pequeñeces era como ofender su decoro profesional y su dignidad de artista...

—Nos plantarán con nuestras cacerolas. —dijo Gastón, al terminar su discurso, con un gesto de hombre convencido y descepcionado.

Doña Antonia seguía el hilo de sus pensamientos. Así se arruina la gente, meditaba con cierta amargura, y esa pena de ver volar sus pesos, como las hojas marchitas en el monte, un día de temporal. Sin embargo, los argumentos de Gastón eran contundentes, y Renato no lo haría por menos. Por otra parte, Gastón abundó en detalles sobre las casas distinguidas en que sirviera. La familia de Obes gastaba mucho más...

—¡Cómo! — interrumpió doña Antonia.

—Usted estuvo en lo de Chiche?

—Y Gastón le explicaba el mecanismo de

esa vida rumbosa de Chiche, de la barone-

sa de Zevik, la deliciosa Manón, y otras señoras de gran prestigio; sin contar el tren de esas casas misteriosas, llenas de interés, como todo lo prohibido... Aquí se entraba en la regla del pecado, y al oír esos nombres famosos de las señoritas Ni-Ni y Be-Be, de la actriz Le Blanc, doña Antonia cubrió su cara con las manos, horrorizada... Y Gastón, sonreía, en ese placer de asombrar a su patrona con relatos que eran como los de los cuetos árabes. Y desfilaron, en una teoría bulliciosa y deslumbradora, todo ese lujo alegre de comidas y de fiestas, de joyas y de elegancias, distracciones de distinción, de ocios simpáticos y muy costosos...

Así, el estado de alma de doña Antonia era algo parecido al del soldado e nlos alrededores de la batalla. Sentía el peligro que andaba por el aire; y un cierto temor, una desconfianza de ese mundo de misterio, la llenó de zozobras. Ah!, esa atmósfera tranquila de la estancia, esa vida apacible y despechada; reina y señora de toda esa sociedad de buenos vecinos que constituyen una burguesía seria y sólida en formación...

"NAMBEI" Compañía de Importación y Exportación Sociedad Anónima Telegramas "NAMBEI" U. T. (33) 3001, 3002, 3003, 3004, 3008 y 3571 T. T. Buenos Aires. 904	T. NISHIZAWA Representante de Mitsubishi Shoji Kaisha, Ltda. FLORIDA 229 — U. T. 33-2981-2982	F. KANEMATSU y Cía. Ltda. Importaciones y Exportaciones JUJUY 136 - U. T. 45, Loria 5823 y 5824	S. TSUJI Importador BALCARCE 682 - U. T. 33 Avda. 5744
BARMIENTO 470 BUENOS AIRES	S. YAMADA y Cía. Importadores MORENO 2039 U. T. Cuyo, 47-4354 y 4405	PIDA SIEMPRE Marca KANEBO PARA TEJIDOS RIVADAVIA 1210 (4o. piso) U. T. 38 - 3239	LA MAISON SATUMA K. YOKOHAMA Objetos de Arte y Antigüedades ESMERALDA 1080 - U. T. 31-8601 Sucursal: SUIPACHA 865 - U. T. 31-4837
H. KATO Unica Fábrica Japonesa de Tejidos de Sedas y Gran Instalación de Tintorería HERRERA 2097 y 2111 - U. T. 21-1841	IIDA y Cía. Ltda. (Takashimaya) Importadores y Exportadores RODRIGUEZ PERA 162 U. T. Mayo 38-3419	M. OMURA Importador de artículos generales del Japón SAN MARTIN 235 - U. T. 38-2683	S. KAISEKI Representante de DAIDO BOEKI KAISHA LTD. Kobe, Japón Importación y Exportación MORENO 1388 - BUENOS AIRES U. T. 38 - Mayo 7286
SADAO HATTORI IMPORTADOR Especialidad en artículos de Cepillería LINIERS 649 - U. T. 45, Loria 3218	N. HARA y Cía. Importadores BELGRANO 1470 U. T. Mayo 38-2438 y 9437	S. ANDO y Cia. Importadores DÉFENSA 532-40 U. T. 33 (Av.) 2296	NAOJI SAITO BUENOS AIRES BOEKI ASSENJO ROQUE S. PENA 616 - 7º PISO U. T. 33 - 6374
KATSUDA y Cía. Importadores MEXICO 1474 - U. T. 38, Mayo 2318	CARLOS C. ISHIY Importador y Exportador Bm6. MITRE 341 - U. T. 33 Avda. 9782	JIRO HONDA y Hno. Importadores de Artículos Generales del Japón MORENO 1320 - U. T. 38 Mayo 2718	GUIA JAPONESA
B. TAKINAMI Importador Casa Establecida en el año 1905 VICTORIA 2702 — U. T. 45 - 8180	TAKAO ARAI Representante de B. ESPECIE DE YOKOHAMA Ltda. Avda. ALVEAR 3900 - 7o. piso U. T. 72 - 1469	Casa "YAMANAKA" Oriental Fine Art Curious VIAMONTE 624 - U. T. 31 7846	LEGACION DEL JAPON: Reconquista 336. — U. T. 31-3193. CONSULADO DEL JAPON: Reconquista 336. U. T. 31-0978 CAMARA DE COMERCIO JAPONESA: Avenida Roque Saenz Peña 616. 7o. Piso. — U. T. 33, 1452. INSTITUTO CULTURAL ARGENTINO-JAPONES: Viamonte 1485. ASOCIACION JAPONESA: Patagones 840. — U. T. 23-4893. COMPARIA DE VAPORES O. S. K.: ROQUE S. PENA 616 - 2º Piso U. T. 33-1051 - 1052 - 1053 y 9998
I. HIROTA Importador de artículos generales del Japón CHILE 1029 - U. T. 37 (Riv.) 0251	CASA ITOH (S. OHTA) Representante de C. Itoh y Cia. Ltda., SAN MARTIN 66 - Esc. 304-305 U. T. 34, Defensa 5168	K. KAWAI Compañía Argentina Comercial e Industrial de Pesquería DEFENSA 1507 U. T. 23-8256	
N. IKEDA The National City Bank of New York BARTOLOMÉ MITRE 502 U. T. Avenida 33 - 4081			